

IAAF キッズアスレティックスと身体リテラシー —IAAF キッズアスレティックスの理念と我が国での展開—

小林敬和
中央学院大学

1. キッズアスレティックスとは

キッズアスレティックスは、国際陸上競技連盟コーチ教育認証制度 (IAAF CECS : 図1) のレベル I 「ユースコーチ」コースの中に設けられた子ども向けの陸上遊びのプログラムである。

国際陸連は、これを Kids' Athletics として、2007 年から本格的に世界規模で展開しており、世界各地にある直轄センター (RDC : Regional Development Center) を中心としてこのプログラム

を運用する指導者の養成を行い、指導者は各国・地域に帰ってこれを普及させるというミッションが課されたシステムである。国際陸連加盟国 (Member Countries) は 214 (2018 年末現在) であり、その中およそ 134 か国でキッズアスレティックスが取り組まれている世界最大のプログラムといっても過言ではない。つまり、世界標準の指導法の教育を修得し認証された指導者が普及に努めるといった仕組みであり、子ども達はプログラムを介して世界中の子どもたちと繋がっていると言える。これは、まさに

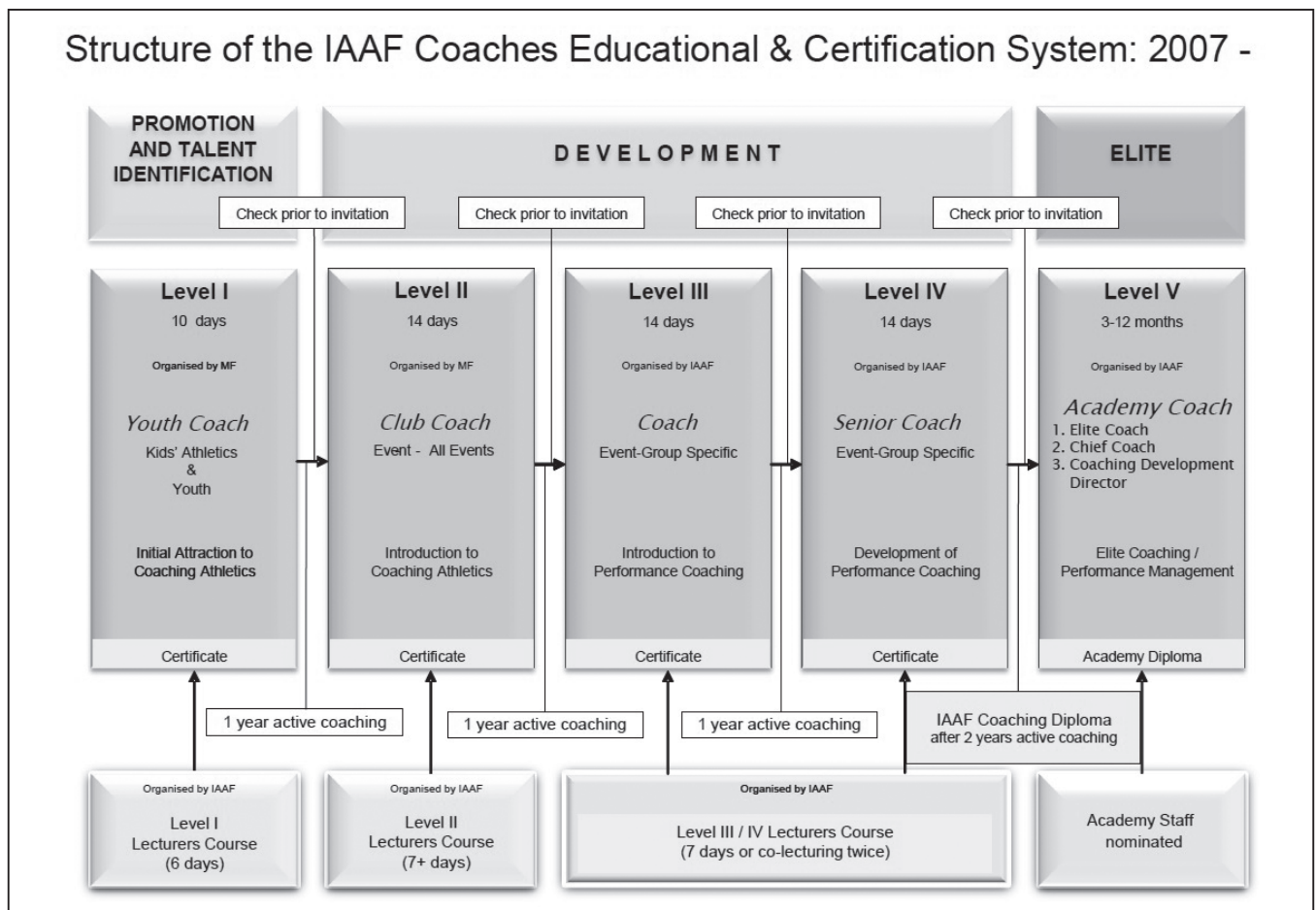


図1 国際陸連コーチ教育システム構成図 (2007 ~)

スポーツを通じた“グローバル化”である。
 以下は、国際陸連ウェブサイトによるキッズアスレティックスの紹介（原文）である。

IAAF Kids' Athletics is one of the biggest grassroots development programmes in the world of sports. Created in 2005, IAAF Kids' Athletics has been implemented in 134 Member Federations and has reached an estimated cumulative audience of more than 13 million children.

The IAAF objectives of the programme are to make Athletics the number one participation sport in schools, to educate kids into sport in general and athletics in particular and thus promote a balanced and healthy lifestyle, and to attract and sustain the potential sporting stars of tomorrow.

The IAAF Kids' Athletics aims to ensure a steady and sustainable policy of development

of the sport of Athletics. The aim of which is to introduce children to Athletics at a basic level.

The programme is not intended only for clubs and Member Federations but also for schools and all institutions who are interested in the well-being of children.

The IAAF aims to popularise athletics in the six areas through a programme of several competitions called “A Team Event for Children”, which comprises of three event groups: Sprinting/Running Event Group, Jumping Event Group and a Throwing Event Group. There are three age categories targeted by the programme: 7-8 yrs, 9-10 yrs and 11-12 yrs.

The IAAF has also initiated a programme to educate the lecturers and coaches who run individual IAAF Kids' Athletics competitions.

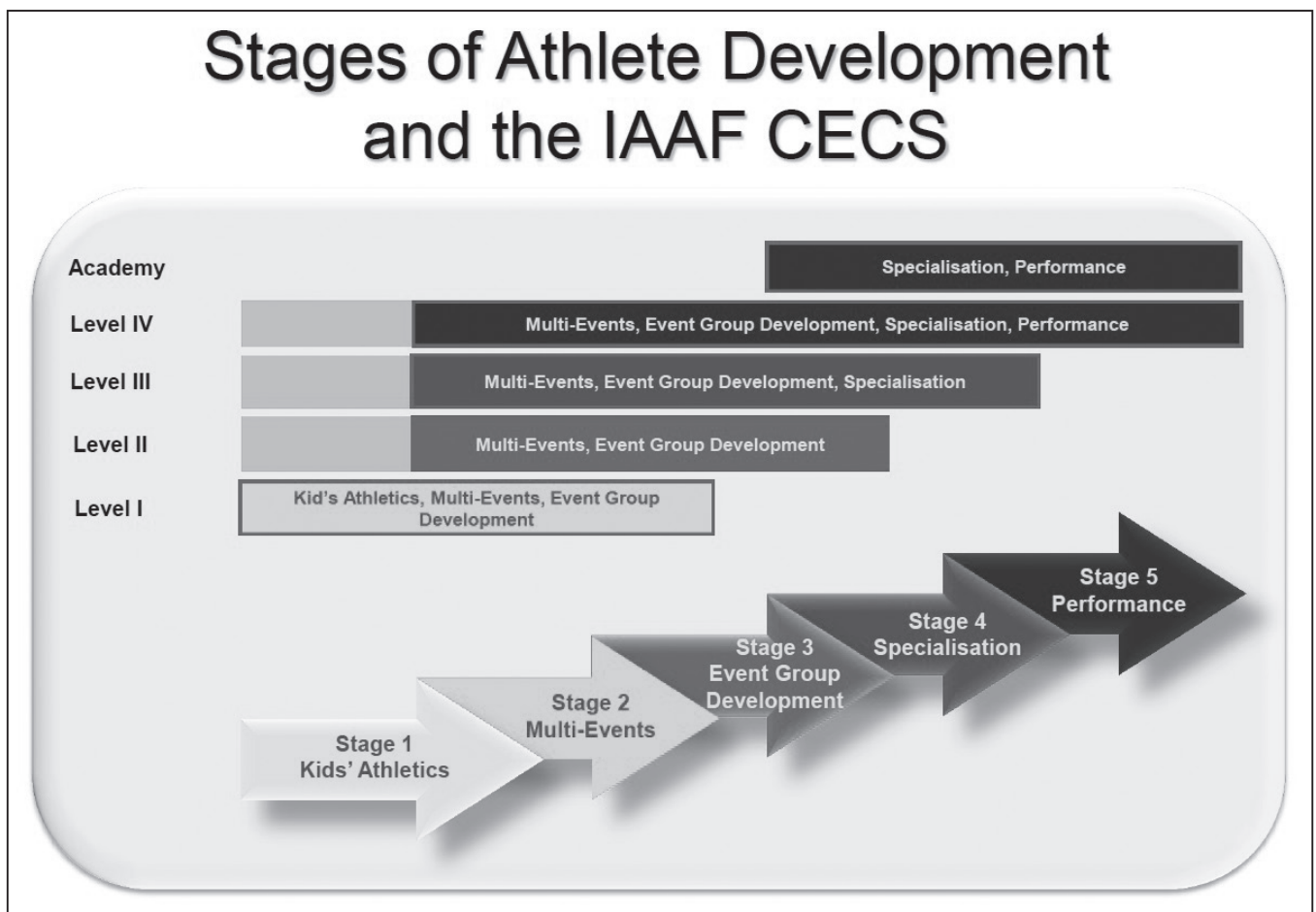
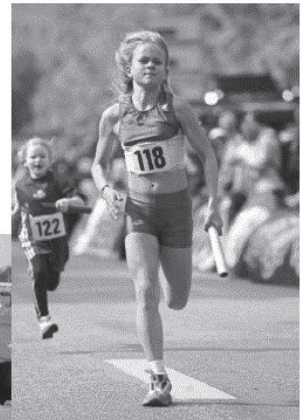


図2 国際陸連コーチ教育システム資格系統図（2007～）

Level I – Youth Coach



- 10 day course
- Kids' Athletics
- Youth – 13 to 15

Objective:

- Initial Attraction to Coaching Athletics.

図3 レベル I 「ユースコーチ」 コースの概要 (2007 ～)

2. わが国でのキッズアスレティックスの導入経緯

全世界で先駆けてキッズアスレティックスが公式に紹介され、その指導者（各国で指導者を育てる講師）の研修及び認証を行ったのは、2007年秋にRDC北京で開催されたIAAF CECS Level I Lecturer Course（国際陸連CECS認定レベルI講師コース）である。ここには当時IAAFのMSD主管のAbdel Malek El-Hebil氏とキッズアスレティックスの発案者の一人であるCharles Gozzoli氏（FRA）が担当講師で、わが国からは繁田普及育成委員長および筆者小林普及育成副委員長）の二名がこの研修に参加しIAAF CECS Level I Lecturerの認定を受けた。ここでの教えは、国際陸連のコーチ教育システム（CECS）を各国に持ち帰りレベルIコースを各国で開催することと同時に、キッズアスレティックスの世界的な規模での普及に貢献せよというミッションでもあった。これを受けて翌2008年には、日本で初の国際陸連レベルIコーチコースが開催されるに至った。

その後わが国では、これらの国際陸連認定講師が中心となり、レベルI「ユースコーチ」コースを運営し、国際陸連公認コーチを養成することになっ

た。これまで、レベルI「ユースコーチ」コースは、2008～2010年と計3回が日本陸連主管で開催され、50名余の国際陸連公認レベルI「ユースコーチ」を養成する実績をあげた。

しかし2011年には講習会の開催が見送られ、国際陸連コース開催規定の緩和もあって2012～2015年は東京陸上競技協会の主管でコースを開催する運びとなった。その後再び日本陸連が運営主体となり2016～2018年まで3回、通算で計10回（資格認定者計200名余）の開催実績を重ねている。

キッズアスレティックスのイベントは、わが国では2009年の体育の日に、文部科学省、（公財）日本体育協会、（公財）日本オリンピック委員会などが主催する「体育の日」中央記念行事スポーツ祭り2009にて、JOC味の素ナショナルトレーニングセンターで、日本陸上競技連盟が主管する陸上競技教室の一環として開催されたのが始まりであった。これは、当時の同センター陸上競技専任コーチングディレクターであった小林が普及育成委員会に諮り、上記のレベルI有資格の委員に運営・指導が託された。以後、この形式で体育の日では恒例の行事となり2013年まで毎年開催されるに至った。それ以降、数名の委員会委員が世界各地に遠征に行った際、競



図4 2016年キッズデカスロンチャレンジ (川崎)



図5 第2回ユースオリンピック (南京 2014) でのキッズアスレティックス

技会のサブイベントや場外イベントとしてキッズアスレティックスが開催されていたとの報告を受け、委員会内で陸上競技の普及プロモーションの必要性が討論され、2016年から各種の日本陸上競技連盟主催競技会のサブイベントで「IAAF キッズアスレティックス準拠キッズデカスロンチャレンジ」(図4)を展開する経緯となった。


日本陸連のこの活動は、本来のIAAFキッズアスレティックス概念や目的とは多少異なるため、準拠しながらも別名称で実施する運びとなった。因みに、南京のユースオリンピックや北京の世界陸上競技選手権では、実際に小学校やクラブ単位の参加でチーム対抗戦を行っており、本競技場さながらの盛り上がりを見せていた。そこにIAAF会長・副会長はじめ理事会メンバーや往年のスーパースター達が訪れ、子ども達の注目を集めていた。(図5)

3. IAAFのコーチ教育にある身体リテラシーの位置づけ

IAAFのコーチ教育に関する教材の中で「身体リテラシー(Physical Literacy)」として表現されている部分は少ないが、講師用スライドの中で最も注目すべきは図6及び図7である。この資料は小林が訳して実際に日本におけるレベルI「ユースコーチ」コースで使用しているものである。

いわゆる基礎的な体力要素と運動能力(A)をベースに、陸上競技であれば「走る・跳ぶ・投げる」などそのスポーツ種目に見合った基礎的な能力(B)、さらに、走から跳へ(つまり助走から踏み切り着地までの一連動作を応用的な能力(C)とする。同様にターンして投げる、スライドやステップ(技術用語的にはグライドやクロス)して投げる、といった各種の投擲動作にも当てはまる。また、そのスポーツとは直接関係ない他の能力(D)とは、例えば陸上競技に関係のない「泳ぐ」や「登る」「蹴る」「捕る」などの要素である。総じてここではAからDまでの能力要素をすべて合わせ持つ(言い換えれば兼ね備える)ことが「身体リテラシー」であると理解できる。すなわち、IAAFはこの年齢期の運動でキッズアスレティックスを推奨し、陸上運動ばかりでなく様々なスポーツに触れることによって身体の健全な発達を促すことが重要であることを示唆している。

また、次の段階にも身体リテラシーの重要性が述べられている。この段階には、「身体能力」「運動学習」「機会」といった3つのキーワードがある。「身体能力」はこの年代の発育発達の観点から極めて重



Stage 1: スポーツ遊びで興味をもつ


A 基礎的な体力や運動能力

B スポーツ種目に見合った基礎的な能力

C スポーツ種目に見合った応用的な能力


D そのスポーツとは直接関係ない他の能力

適切な年齢
7 - 11



フィジカルリテラシー=A+B+C+D

図6 講師用スライドにあるフィジカルリテラシーの説明(1)



Stage 2: いろいろな種目を経験する

- ・ キーワードは、
身体能力、運動学習、機会
- ・ 基礎的な体力・運動能力がこのステージの間に習得されなければ、その選手は遺伝的潜在能力、あるいは最適なパフォーマンスレベルに達しないかもしれない
- ・ フィジカルリテラシーを洗練させる

適切な年齢
11 - 13




図7 講師用スライドにあるフィジカルリテラシーの説明(2)

要な要素である。「運動学習」は動作や運動がどのように成り立っているのか理解しながら、安全で正確そして効率的な練習(学習)を段階的に実施することである。そして「機会」は身体能力や運動学習を試す機会すなわち測定や試合・競技会に参加することである。そもそも「リテラシー」とは、読み書き能力や基礎的なものを活用・応用する能力といった意味であるため、例えば漢字でいうと、画数の少ない基本的な文字から学習すると徐々に画数の多い難解な字を読み書きすることができてくる。英語や算数も同様である。「身体リテラシー」も同じように考えると、図7に記されている通り、この時期までに基礎的な体力や運動能力(スキル)が備えられないと高い水準を目指すことが困難であろうという示唆がある。したがって、「身体リテラシー」を洗練させるとある通り、この時期は基礎的な能力を活用し応用する段階であることが窺える。よってこの

2枚のスライドにある「身体リテラシー」の解釈は広範囲で意義深いと思われる。

この他にも身体リテラシーに関連する「競技者としての成長」「動機づけ」「社会的な発達」「身体的な発達」「心理的な発達」「コミュニケーションスキル」等の科目が多数あり、またキッズアスレティックスの内容や運営に関する科目や資料も多い。これらを総覧すると、身体リテラシーは単に身体運動に関係するものばかりでなく、子どもがスポーツを通して社会性を学び、心理的・情緒的成長を遂げることにも関係していることが窺える。これをスポーツとして捉えると、スポーツ観（意義や価値、方向づけ、統制など）やスポーツ規範（エチケットやマナー、ルール遵守、審判への敬意や相手の存在の尊重など）を基盤にした、まさにスポーツマンシップ、フェアプレー、チームワーク、リーダーシップの涵養である。こうしたキーワードはIAAFキッズアスレティックスの関連資料の中に散見されるので、国際陸連の意図としてキッズアスレティックスを通して身体リテラシーの向上に寄与する適切なプログラムであることが分かった。これらは何れも国際陸連レベルI「ユースコーチ」を受講しなければ共有することの出来ない内容である。したがって、IAAFキッズアスレティックスは単にその内容や運営手法を参考に安易に実施することは出来ず、言い換えればこれらを学んだ指導者が積極的に普及する義務があると言っても過言ではない。

4、まとめ

わが国の陸上競技界に関しては、やはり現状の早期競技専門化・低年齢化の傾向や流れの中では、小学校期において身体リテラシー重視を唱えても暖簾に腕押しの感が否めない。実際に陸上競技を教える多くは任意クラブの指導者であり、「機会」（競技会）で良い成績をあげるという児童本人と保護者そして指導者の意志が一致するところが大多数を占めている現状である。

むしろ小学校・中学校の先生方に期待したいところであるが、校務過多や部活指導時間の制限などの制約がある。このような状況において身体リテラシーの理念をいかに啓蒙してゆくかは今後の日本陸上競技連盟における普及育成方針に期待したい。

IAAFは、世界の各地域に直轄センターを開設している。東アジア（中国・日本・モンゴル・北朝鮮・韓国・台湾・中国香港・中国マカオ・ベトナム・ラオス）の10か国地域を管轄するIAAF Regional

Development Center BEIJINGは、中国の北京体育大学にオフィスを構え、国際陸連の関連教育内容やその出版物はすべて中国語に訳されわが国にも供与されている。そこで「フィジカルリテラシー（身体リテラシー）」は中国語で「身体素養」と翻訳されている。日本語で「素養」は「普段の練習や学習によって身につけた技能や知識」と意味付けられているので、我々日本人には理解しやすく馴染み深い言葉でもある。最近はこの「素養」という言葉すら使う機会が少ないが、「身体リテラシー」を「身体素養」と解釈して論じられることが望ましいと思われる。

参考文献

- IAAF. The Official IAAF Guide to Coaching Athletics, INTRODUCTION TO COACHING
国際田联地区发展中心北京. 教练理论入门（双语翻译）
- IAAF. The Official IAAF Guide to Coaching Athletics, RUN! JUMP! THROW!
国際田联地区发展中心北京. 跑! 跳! 投!（双语翻译）
- 小林敬和他. フューチャーアスレティックス特集号キッズアスレティックス教本
- 公益財団法人日本体育協会. 公認スポーツ指導者養成テキスト（共通科目I）
- IAAF CECS Level I Lectures materials
<https://www.iaaf.org/development/school-youth>